



『蟹工船』とマイノリティ

今西 一

はじめに

数年前からの『蟹工船』ブームは、私たちの世代の人間には、興味深い現象であった。客観的には、若者の非正規雇用が五〇％に接近し、年収三〇〇万円に満たない若者が、両親の年金などをあてにして「パラサイト・シングル」として暮らすという異常な生活が、普通になってきている。これでは少子化に歯止めがかかるはずもない。このままの日本では、一〇年も経たずに、現在の年金制度は崩壊するであろう。

若者たちが、『蟹工船』の冒頭の「おい、地獄さえ行くんだで！」という言葉や、居酒屋やコンビニなどにアルバイトに行く時に、よく使っている、という話も聞かされた。「監獄船」と言われた蟹工船と、現在の若者が行くアルバイトが比較できるか、と怒る人もいるかもしれないが、貧困、ニート、ワーキングプアなど、「人を使い捨てにする社会」が続くかぎり、『蟹工船』は、読み継がれてもいい作品である。

高校時代以来、久しぶりに『蟹工船』を読み返したが、むしろ新鮮な感動を覚えた。現代文学をそんなに読むわけではないが、村上春樹や東野圭吾を読んで、まず感じるのは、その「社会性の喪失」という感想である。古いと言われるかもしれないが、私たち「六八年の世代」は、ロマン・ロランの『魅せられたる魂』を感動して読んだのも、その主人公の「反戦思想」に共感したからである。村上は、確かにストーリーテラーとしてはうまいと思うが、「革命とは、お役所の看板が変わるだけのことよ」（『羊をめぐる冒険』）と言った調子で語られては、ガッカリする。実に巧妙に、革命や社会運動を「風俗」現象にすり替えていく手法

には感心する。村上たちが、若者の間で圧倒的に人気があるのは、一面ではこの若者たちの「生きにくさ」を巧みに表現しているからである。これは、『ノルウェーの森』でも、最近の『一Q八四』でも同様である。

むしろ「プロレタリア文学」が持っていた「社会性」「政治性」が懐かしく読み返されるのは、私の老化現象だけではなく、「三・一一」以後の脱原発運動などの「新しい社会運動」が、日本でも再燃していることと無関係ではないと考える。しかも、『蟹工船』では、労働者の性的なメタファーが多様に登場し、その俗語の使い方も含めて、民衆の差別性や暴力性がリアルに描かれており、決して民衆世界を理想化するものではない。ここでは、歴史を勉強しているものの立場から、多喜二の文学への二、三の問題点を提起しておきたい。そのことが、現在の社会的弱者やマイノリティ問題を考えるうえでも重要であると考えているからである。

一 『蟹工船』の論点

戦後の一時期、「プロレタリア文学」や小林多喜二は、最も攻撃を受けた文学であった。その批判の中心になるのが、平野謙や荒正人ら雑誌『近代文学』に結集した人びとであった。戦後の「近代主義」は、政治学の丸山真男、歴史学の大塚久雄に代表されるが、哲学でも梅本克己の「主体性」論、文学の小田切秀雄の「近代的自我」論など、さまざまな潮流があった。

平野は、特に多喜二批判の急先鋒で、『党生活者』の「ハウスキーパー」問題や多喜二の女性関係、『蟹工船』が集団を描いても、個人を描いていないという表現の問題、晩年の多喜二が私小説に逆転しており、多喜二は革命家ではあっても、「文学の革命」はできなかつたと批判し、政治からの文学の「自立」を説いていった（これを「政治と文学」論争と言った）。戦後は総じて共同体からの「個」の「自立」を説く「近代主義」が、大きな影響力をもっており、これと正当派マルクス主義は対立することが多かった。

その後、一九六〇年代の安保闘争を経て、吉本隆明や武井昭夫からの「前衛党」批判がだされ、文学者の「転向」問題や戦争責任が提起され

た。私は、文学研究では猪野謙二、歴史学では飛鳥井雅道らの影響を受けており、「近代的自我史観」を批判して、文学の「社会性」を重視する議論に魅力を感じていた。ここでは、これらの論争ではふれられなかった、マイノリティの問題を提起しておきたい。

具体的に多喜二の『蟹工船』や『不在地主』を読むと、突然、社会科学の議論がでていき、純粋な文学の愛読者を驚かすかもしれない。しかし、『蟹工船』を書くにあたっては、小樽高商の同期生で、演劇研究会の仲間であった、漁業労働調査所函館支所の乗富道夫に助けをかり、停泊の蟹工船の実地調査を行い、乗組員や労働組合の人から話を聞いているのは有名である（『小林多喜二全集』第四巻「改題」新日本出版社、一九六八年）。従ってこの作品は、極めて記録文学性の強いものである。

また調査に加えて、多喜二の草稿を読むと、新聞からの影響ものが見られるようである。草稿の冒頭では、『東京××新聞』の記事の書き抜きから初めている。「『(北、)北洋の(国際)漁業戦に、巨利をあさ漁る／蟹工船。』として、次のような文章から始まる（()内は挿入文、以下同）。

(一)、「海上に浮かべる移動カニ罐詰工場」— () 荒波ほゆる (カムチャッカ) 北洋の真只中で死線を越えて活躍している) この (わが)「蟹工船」(こそ)は、一寸お伽噺のようだが、一ケ年のに (製造高) 二十三万缶、お金にしてザット八百万円のカニをとってゐる (ってゐる)。(後略)

日露漁業の交渉が二年もかゝって、まだ国営漁区だの、労働法適用だのに引っ掛けて、連日外ム省に泣き込んだり、どなり込んだりして、大騒ぎをしてゐるのにひきかへ、同じ北海洋上の漁業でも、カニ工船だけはどこを風 (が) 吹く■■■かといった案配梅、ロシアなどにビター文毛一本気兼ねする必要がないのだ。何しろ活動舞台は見渡す限り、雲と浪との外はない、北洋の「公海」だ。(領海の外にさえ浮かんでれば) こゝそこにはケチ臭い国家の縄張りなんぞないんだ。

そして、ロシアによる拿捕、蟹工船の発展、「漁夫」「雑夫」の雇い入れ、カムチャッカ航海と蟹工船での缶詰製造の工程、故国からの便りも運んでくる、「中積船」の話が書かれている。この新聞記事を図書館で読んだ男が、蟹工船に乗っていた自分を回想するというエピローグから始まるというのが、最初の設定であつたらしい。

しかし、経済学の教科書ではないのだから、「おい、地獄さえ行くんだで！」という言葉で始まり、函館の雑踏とした労働者の乗り組みの場面から描写する方が、はるかにインパクトは強烈であり、小説としての完成度も高いものがある。

しかし、一九二九年当時の新聞は、蟹工船に対して、実際に厳しい記事を書いている。これは六月二三日付けの『北海タイムス』でも、「極北の海から一工船漁夫の手記一」として、次のような投書が載せられている。

皇土の上、警察権の直下に於いてさへ治外法権の世界「監獄部屋」が存在します。まして司法権を遠ざかること幾百カイリ湮の極北の公海に「監獄船」が浮かんだとて別段不思議ではありません。極北の海上では正邪善悪を超越した大暴力が一切を解決し空に高鳴る鞭の一撃こそ神聖なる法典であります。(後略)

これを引用した司法省の役人遊田多聞も、「之は一漁夫にしては余りに名文過ぎるので、恐らくは新聞記者が其実見記を掲載したと思われる」というのが当たっているであろう。しかもこの遊田の書いた司法省報告『函館を遡源とせる北洋漁業に索聯する犯罪の研究』（一九三〇年）は、戦前の蟹工船の労使関係を知る最善の資料であり研究である。もちろん司法省の役人という彼の立場から来るバイアスには注意する必要がある。ここで遊田は、「工員船労働者の代弁」をするものとして、多喜二の『蟹工船』をあげて、次のように評価している（二七四頁）。

所謂プロレタリア文芸の一ツであるこの作品は帝国主義的段

階に於ける国際資本戦の一場面を捉へ各種の政治的関係や国際資本主義経済の暴露に全力をつくして成功しているが、かの『ジャングル』（アプトン・シンクレア著）一国内の産業資本主義時代を取り扱ひ肉類罐詰製造工業に於ける全生産過程の暴露に主力を注いだ如く蟹の捕獲乃至は罐詰生産工程に関する暴露には余力を用ゐて居るとは見受けられない。又この『蟹工船』と同じ立場から書かれた小説に『セムカ』（昭和四年十一月改造所載前田河広一郎作）があるがこの『セムカ』に於いては陸揚漁場の漁夫生活を暴露し成功して居る。要するにこの『蟹工船』又は『セムカ』は固よりその凡てが事実だと言ふ訳ではあるまいが唯其の持つ思想が如何に多くの人々の胸を打ちつゝあるかと又如何に魚雑夫等が資本主義下に於て恵まれぬ地位に置かれつゝあるかと言ふことを良く紹介し資本主義の欠陥を暴露し労働者の自覚と反省を促しつゝあるかは之を見遁すことが出来ぬである。

遊田は相当な読書家で、アメリカの「プロレタリア文学」と言われているアプトン・シンクレアの『ジャングル』（既に前田河広一郎によって翻訳されている）や前田河の『セムカ』との比較など、今日の文学史でも興味深い論点である。社会科学好きの多喜二が、蟹工船の社会経済史的な位置や、全生産過程を描きたかったことは、草稿ノートの走り書きからも想像できる。多喜二は、トルストイの『戦争と平和』のような「全体小説」を書きたがっていて、いつも「誰か命がけで文学をやってくれる人間はいないか」と言っていたと作家の江口渙は語っていた（聞き取り）。しかし、官憲の弾圧によって、この可能性は消滅した。

二、『蟹工船』とマイノリティ

遊田の報告書を読んで気にかかるのは、彼が付録につけている第一表の函館「昭和三年度露領出漁邦人労務者出身府県別総数調」である。蟹工船の労働者が、北海道（その中身が問題だが）に次いで青森、秋田など東北が多いことは、よく言われているが、最後の「朝鮮人」七八人と

いう数字である。もちろんこの数字の信憑性はそれほど高くないし、帝国臣民として登録した朝鮮人もいるだろう。同年の「露漁漁場出漁々雑夫出身府県別調」でも、六六人の「朝鮮人」が使われており、そのうち六五人は「日露漁業株式会社」であり、一人は、「坂本作人」の個人経営である（四六三～四六五頁）。

要するに蟹工船の労務者・雑夫は、単一な「日本人」だけではない、という問題である。浅利政俊によると、「戦争中になると勿論そこにはアイヌ人、朝鮮人、女子労務者も働き、春から夏にかけての北洋漁業は、まさに民族移動の様相を呈していた」のである（同「北洋漁業と出稼ぎ労働」、桑原真人編『北海道の研究』第六卷、清文堂、二一九頁）。

多喜二が朝鮮人問題を知らないはずはなく、『蟹工船』のなかでも、北海道の「開拓」について、「内地では、労働者が「横平」になって無理がきかなくなり、市場も大体飼いたい開拓されつくし、行き詰まってくると、資本家は「北海道・樺太へ!」鉤爪をのばした。彼等は朝鮮や、台湾の殖民地と同じように、面白い程無茶な「虐使」が出来た」と、北海道の「殖民地」性を語る。そして「土方労働」では、「殊に朝鮮人は親方、棒頭からも、同じ仲間の土方（日本人）からも「踏んづける」ような待遇をうけていた」と指摘している（新潮文庫版、六六～六七頁）。また『不在地主』のなかで、空知川から江別、石狩に至る延々二十里に至る工事に、「土方は皆禪一つで働いていた」。「鮮人は百人近くいた」と書いている（岩波文庫版、二二六～七頁）。この「鮮人」を差別語とするのか、という意見もあるだろうが、私は現在使えば差別語であるが、当時は慣用語であったと考えている。

多喜二は、草稿の冒頭で、興味深い走り書きを残している。「家庭の事」「鮮人のこと」「北海道資本主義侵入史」「殖民地資本主義侵入史」である。最後の言葉は、『蟹工船』の最後が、「この一篇は、「殖民地に於ける資本主義侵入史」の一頁である」（一三九頁）という言葉に対応するものであろう。

「家庭の事」はともかくとしても、蟹工船で働く朝鮮人のことは、多喜二は当然知っていたはずである。それではなぜ蟹工船のなかの朝鮮人（やアイヌ）のことは書かなかったのであろうか。日本の労働者の団結

したストライキを書くのに、蟹工船のなかの朝鮮人やアイヌの差別を書くのが難しかったのであろうか。それが蔵原惟人らが提唱した「プロレタリア・リアリズム」の方法なのであろうか。

現在の朝鮮人差別の問題を、詩人の^{キムシンジョン}金時鐘は次のように語っている。

私の家の郵便受けは「金時鐘」という表札が大きく掛かっています。ところが、この固有名詞を、「キンジショウ」と呼んでくれる人はめったにいません。アルバイトの郵便屋さんとか、来つけない酒屋さん、または配達してくれる人のほとんどは「きんときさん、きんときさん」と呼びます。私は被差別の最たる者といわれている在日朝鮮人のひとりですが、個々の日本人はかくも愛すべき人達なのです。(中略)ですが、疑いもなく「きんときさん」と呼んでいられる生理そのものに、ときたまスーツ隙間風が走ります。この町内に朝鮮人がいるという発想そのものがからっきしないのです。

「日本に日本人以外は住んでいるのは『西洋人、だけだという認識』になり、朝鮮人(中国人)は、「見えない人間」(ラルフ・エリスン)として暮らさなければならないのである。そのことが、今回の東北大震災でも、よく現れれている。テレビなどで、「がんばろう日本」というスローガンが叫ばれて、ナショナリズムが喚起されているが、被害にあっているのは、当然、「日本人」ばかりでない。二〇一〇年の「外国人登録者」では、在日中国・台湾人は六八万七〇〇〇人となり、在日朝鮮人の一二万人を、はるかに超えている。この内、多くの女性が東北の農家に嫁いでおり、東北には、多くの外国人労働者もいるのである。それなのに、彼・彼女らのことが殆ど報道されないというのも奇妙である。

私は、古典的なマルクス主義の大きな弱点は、農業問題とともに、民族問題であると考えている。「民族」よりも「階級」を重視し、「階級闘争」に勝利すれば、「民族」問題が自動的に解決するような見方である。このことが非現実的であったことは、旧ソ連の崩壊の時の民族問題の噴出、今日のチェチェン問題を見ても明らかである。中国もまた、チベッ

ト、新疆ウイグル、内モンゴルなど自治区の「同化」政策の「民族的」矛盾が明らかになってきている。多喜二の「プロレタリア・リアリズム」が、「蟹工船」を描くなかで射程に入れられなかった問題を、今日では考える必要がある。

三、国内植民地について

『蟹工船』のもうひとつの魅力は、「国内植民地」としての北海道・樺太を、先駆的に問題にしたことである。既に引用した部分でも、「内地」と「植民地」北海道・樺太ということが指摘されているが、次の有名な叙述も引いておきたい（六八頁）。

北海道では、字義通り、どの鉄道の枕木もそのまま、一本々々労働者の青むくれた「死骸」だった。築港の埋立には、脚気の土工が生きたまゝ、「人柱」のように埋められた。——北海道の、そのような労働者を「タコ（蛸）」と云っている。蛸は自分が生きて行くためには、自分の手足をも食ってしまう。これこそ、全くそっくりではないか！そこでは誰をも憚らない「原始的」な搾取が出来た。「儲け」がゴゾリ、ゴゾリ掘りかえってきた。

しかも、そして、その事を巧みに「国家的」富源の開発ということに結びつけて、マンマと合理化していた。抜け目がなかった。「国家」のために、労働者は「腹が減り」「タ、キ殺されて行った。

まず北海道の「原始的蓄積」の厳しさが指摘される。そして——それから「入地百姓」——北海道には「移民百姓」がいる。「北海道開拓」「人口食糧問題解決、移民奨励」、日本少年式な「移民成金」など、ウマイ事ばかり並べた活動写真を使って、田畑を奪われそうになっている内地の貧農を扇動して、移民を奨励して置きながら、四、五寸も掘り返せば、下が粘土ばかりの土地に放り出される。豊饒な土地には、もう立札ほうじょうが立っている。雪の中に埋められて、馬鈴薯も食えずに、一家は次の春に

は餓死することがあった。(中略)

稀に餓死から逃れ得ても、その荒ぶ地を十年もかゝって耕やし、ようやくこれで普通の畑になったと思える頃、それは実にちアんと、「外の人」のものになるようになっていた。資本家は——高利貸、銀行、華族、大金持は、嘘のような金を貸して置けば、(投げ捨て、置けば) 荒地は、肥えた黒猫の毛並のような豊饒な土地になって、間違なく、自分のものになってきた。

と、見事に北海道移民の「搾取」の仕組みを指摘している(七〇頁)。ただ、ここでも『不在地主』のなかでも、開拓農民の搾取や貧困の実態が描写されているが、その土地が先住民であるアイヌなどから取り上げられてことは、不思議なほど触れられていないのである。

私が、「国内植民地」という概念を使って、従来使われてきた「内国植民地」概念を使わない理由のひとつは、幕藩体制までの蝦夷、樺太、琉球、小笠原などは、「異域」であって、とても「日本」という範囲で括れるものではない、ということ強調したいからである(ましてや「固有の領土」などではない)。富山一郎などの言うように、近代国民国家による「再領土化」と言った方が正確であろう(同「国境」『岩波講座 近代日本の文化史』第四巻、岩波書店、二〇〇四年)。

また田中彰のように、野呂栄太郎や小林多喜二らの議論を継承した「講座派」的なマルクス主義者が、「内国植民地」論を使うときには、経済的、政治的な「後進性」が問題にされるが、これもコロニアル・モダンの問題が欠落した議論に陥りやすいという問題がある。詳細は拙稿「帝国日本と国内植民地」(『立命館言語文化研究』第一九号、二〇〇七年)、同「国内植民地論・序論」(『商学討究』第六〇巻一号、二〇〇九年)を参照していただきたい。

おわりに

多喜二の文学のなかに、マイノリティの視点が弱いと言っても、これは当時のマルクス主義者全般の問題である。一例をあげれば、日本共産党は、一九七〇年代のはじめに、「民主連合政府」の綱領を提起する時

に、はじめて「アイヌ問題」を民族問題として提起するという自己批判を、上田耕一郎の名前で行っている。それまでは「アイヌ系日本国民」などと呼んでいたのを、アイヌのなかの共産黨員らによって批判されたからである。多文化主義などが本格的に議論されるのは、一九八〇年代に入ってからである。

新潮文庫の『蟹工船』の「解説」は、蔵原惟人が書いている、一九五三年のものをそのまま載せている。蔵原は、『蟹工船』が「全体としての集団の力はかなりダイナミックに示されているが、個々の形象がはっきりと印象づけられない結果をともなった」という弱点も指摘している（二七二頁）。また『党生活者』では、平野謙らの批判を意識して、「私はその当時の運動の歪みを肯定するものではもちろんない」と言っている。

しかし、五〇年代の初頭ということもあって、蔵原は「透谷、啄木、多喜二」という二〇代で早世した「三人のT」に、「新しい国民文学への道を切りひらいた人」という評価を与えている（二七一頁）。当時の「国民文学」論に乗った評価である。しかし私は、『蟹工船』が、多喜二の目指していた「全体小説」のうえに書き直されて、海上の朝鮮人やアイヌの生活と差別、尾西康充が指摘している一九三二年のソ連の蟹工船での日本人労働者の争議まで視野に入れた（同「『蟹工船』における労働者の連帯」『三重大学 日本語学文学』第二〇号、二〇〇九年、七三頁）、新しい「海洋文学」として書き直されていたのでは無いだろうかと想像する。もちろん現実には、多喜二にはその可能性は残されていなかった。